

タイトル	送る言葉：栗原豪彦先生に感謝を込めて(退職記念)
著者	上野，誠治
引用	北海学園大学人文論集，45：23-24
発行日	2010-03-31

送る言葉——栗原豪彦先生に感謝を込めて

上 野 誠 治

栗原豪彦先生は前任校である北海道大学言語文化部・同大学院国際広報メディア研究科（兼担）を退官された後、2003年（平成15年）4月に本学人文学部英米文化学科に着任されました。ちょうど、私が在外研修で1年を留守にする時期と重なったため、着任早々、英語学概論や演習以外にも英語文法論や英語史概説など多くの言語学・英語学関連科目を担当して頂くことになってしまいました。また、大学院では英米言語文化特殊講義および演習をご担当になり、学生たちに英語を中心に自然言語の諸相およびその科学研究のための基礎概念や研究方法について指導をして頂きました。特に、演習では語用論や社会言語学の観点から言葉とコミュニケーションの問題を扱っておられました。

私事になりますが、先生との出会いは今から約30年前、大学の3年生の時で、当時、英語学演習を担当されていた先生に、生成文法理論の初歩を教えて頂きました。使用した Jeanne H. Herndon 著 *A Survey of Modern Grammars* というテキストには、約60ページにわたって行間書き込みが残っています。初めて触れた生成文法理論と1年間格闘した懐かしい思い出です。先生とはそれ以来のおつきあいですが、まだ駆け出しの頃、ある学会で研究発表した折に、「参考までに」と仰って論文のコピー¹⁾を渡して下さったこともありました。またつい最近も、投稿論文を読んで頂いたときに、論述に関する貴重なご助言とともに、参照すべき先行研究²⁾の存在をご教示頂きました。いずれの場合も、幾分かましな論文に仕上がっ

¹⁾ Hantson, André. 1983. “*For, With and Without as Non-finite Clause Introducers,*” *English Studies* 64.

たとすれば、それはまさに先生のおかげであります。またある時には、英語の表現で気になったことがあり、気楽な気持ちで先生に質問をすると、すぐにいろいろな文献を調べたり、インフォーマントに意見を聞いてくださったりもして頂きました。そのようなわけで、北海学園大学における先生は私にとって研究領域を同じくする同僚の一人であると同時に常に「先生」でありました。

先生は、教育・研究以外においても、おそらく先生でなければ到底解決し得なかっただろうと思われる難題にも取り組まれました。とりわけ、学部に設けられた英語教育委員会（EEC）の委員長を現在に至るまで長らく務められ、学部の英語教育を取り巻く諸問題の解決にご尽力頂きました。一方的にご自身の見解を述べるのではなく、対立する双方の意見に誠実に耳を傾けられ、最後には皆が納得のいく結論を導いていくというやり方であつたように思います。

近年、先生は学説史的な視点から言語理論における基礎概念の見直しに取り組まれ、「言語学の対象をめぐる二分法再考」（『人文論集』第 35 号）、「ポライトネス理論をめぐる論争」（『人文論集』第 41・42 号）、「ブルデューの言語論」（『学園論集』第 140 号）などの論文を精力的に発表し大きな成果を上げられています。言語学の対象や方法論に関する二分法の理論的な意味合いを検討し、とりわけポライトネス理論に見られる論争が、ポライトネス自体の定義に関して研究者間にいまだ合意がないことによる必然的な結果であることなどを指摘されています。

栗原先生にはご退職後もご健勝で、言語学・英語学に関するご研究において一層のご活躍をお祈りするとともに、折に触れて大所高所からのご助言、ご指導をお願い申し上げます。最後になりましたが、様々な領域で本学のためにご貢献頂きましたことに対し、改めて衷心より感謝申し上げる次第です。

²⁾ Lakoff, George. 1974. "Syntactic Amalgams," *CLS* 10.